

第237回「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(12月)句会記録

句会が始まります。奥田さんに指名された順番に、自分が選句した句を、声を出して読んでいきます。この世界ではこれを「披講する」と言いますが、句会の前半で「声を出して句を読むのは、ちょっと気分爽快です。披講の最終段階では、天賞に選んだ句を発表して、天賞に推挙した理由を述べます。欠席者を含め全員の選句を発表していくのですが、声を出して句を読んでいくというのは、「俳句を学んでいる」実感がして、これまた快いものがあります。

自分の詠んだ句が、仲間選ばれて披講されるときは嬉しいものです。逆に一句も詠まれないときは寂しいです。「もう少し丁寧に作句しておけば良かった」と、後悔の念が湧いてきます。反省するに「詠んだ句をもう十回、声を出して読んでいたなら、こんな間違いはしなくて済んだのに」と。判っていて同じ失敗を繰り返しています。来年はもう少し落ち着いて、「詠んだ句を読み返す。もう一步レベルを上げ、時間をかけて句を見直すこと」にしたいと思います。

12月の投句にご参加の皆さま(16名)

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

句会に参加された方々(6名)

創風さん、和感さん、月草さん、晶如さん、傘吉さん、白然。(6名)

本日の優秀句並びに獲得票数

今月、皆さんに優秀句として選句され、天賞に推挙された句、投票の多かった最多得票賞(☆印)の句は、下述の通りです(欠席された10名の方の選句は、奥田さんが代読披露して下さい)が、優秀句の4句を分析致します。

◎『初雪やそろりそろりと下り坂』	錦流	天3㊄3
◎『墳丘のねむりは深し冬の蝶』	晶如	天2☆4
◎『臘月やひとり暮らしの箸一膳』	栄女	天2☆4
◎『爺と婆似た笑顔して冬ぬくし』	傘吉	天1☆6
◎『美しき落ち葉拾ひて書にはさむ』	月草	天1☆5
◎『日向ぼこ親子三代埴輪の眼』	晶如	天1☆4
◎『聞き役に徹し我慢の懐手』	晶如	天1㊄3
◎『駅前の煌めく灯り聖夜待ち』	柴楽	天1㊄3
◎『薄氷を透けせせらぎや光りをり』	白然	天1㊄2
◎『みはるかす枯野に風の音立ちぬ』	多佳	天1㊄1
◎『酔い痴れて夢や現や除夜の鐘』	傘吉	天1㊄1
◎『粥納豆煮大根の朝餉かな』	白然	天1㊄1
◎『初雪に音せぬ町となりけり』	多佳	☆4
◎『黄金散る議事堂見上ぐ冬の坂』	栄女	☆4

最多天賞句は、天賞3票を獲得した錦流さんの句「初雪やそろりそろりと下り坂」でした。季語は「初雪」、特に下り坂を「そろりそろりと下る」ところが、読者の共感を得たと思われまふ。初雪には人は、心を弾ませるものですが、下り坂の雪は、滑って転倒する恐れのあることを、これまでの経験で承知しています。その「そろりそろりと下っていく

姿」こそ、「老いていく人生を表現した句ではないか」と、感じ取っている読者もありました。

次に晶如さんの句「墳丘の眠りは深し冬の蝶」が、天賞2票と優良句として4票を獲得しました。墳丘とは古墳のことであり、まさに永い眠りについて人々を指しています。そして、対比として短い眠りというか、冬の蝶の短い生命を登場させた、生の世界の無常という儚さを表現しました。

次に最多得票(☆印)賞は、6票を獲得した傘吉さんの句「爺と婆似た笑顔して冬ぬくし」が、最多得票賞を獲得しました。傘吉さんは夏休みが済んで、9月、11月、12月と、このところ連続して最多得票賞を獲得しています。拍手喝采です。この句の魅力的な表現葉、下五の、そして季語の「冬ぬくし」と、忠七の「似た笑顔して」という寒い冬の中の暖かい感触です。作者、傘吉さんのにこやかで、静かな笑顔の中に、この句の暖か味と同じものを感じますね。

次に最多得票賞の次点として、月草さんの句「美しき落ち葉拾ひて書にはさむ」が、5票を獲得しました。句意は「綺麗な落ち葉を拾って書に挟んだ」という句ですが、上五「美しき」の表現に問題があるのではとの指摘がありました。具体的には落ち葉の表現が不充分ということでしょう。後日、月草さんから、上五を「紅葉せし」にしたいとの申し入れがありました。「紅葉せし落ち葉拾ひて書にはさむ」です。

高柳克弘著「名句ドリル」(NHK出版 78頁～) コラム「詠む読む」 推敲・添削で言葉を磨く

(～略) 推敲は、自分で句の言葉を直すこと。添削は誰かに直してもらうことです。句を作りっぱなしにするのではなく、推敲や添削を通して、揺るぎのない完成を目指しましょう。先人たちの名句も推敲や添削のたまものです。いくつか紹介しましょう。

芭蕉の推敲

「何とはなしになにやら床し菫草」(推敲前)

「山路来て何やらゆかしすみれ草」(推敲後)

菫の可憐さに無性に心惹かれる、というのです。初案の「何とはなしになにやら床し」では、抽象的・観念的に過ぎて、「山路来て」とすることによって、菫の咲いているのは山道であると、背景が具体的に見えてきます。芽吹きの木々の山道を登ってきて、春の気分が高まってきたところに、可憐な菫を見つけて、「何やらゆかし」の感動に浸っているのです。心理描写が自然になりましたね。

子規による漱石句の添削

「冬籠り今年も無事で罷りある」(添削前)

「冬籠り子猫も無事で罷りある」(添削後)

若き日の夏目漱石は、友人であった正岡子規に俳句を見てもらっていました。これは子規による添削。添削前では、冬籠りの自分のことしか言っていないので、平板の誹りは逃れられません。添削後に「小猫も」として、自分の他に飼っている小猫を登場させたことで、「どこかで拾ってきた猫を、大事に育てていたのだろうか」と想像され、句に物語性が生まれました。

この添削が、のちの「吾輩は猫である」の誕生につながったのかも？と空想すると、楽しいですね。

久保田万太郎の推敲

「淋しさはつみ木あそびにつもる雪」 (添削前)
「淋しさはつみ木のあそびつもる雪」 (添削後)
「さびしきは木をつむあそびつもる雪」 (さらなる添削後)

初案では、「つみ木あそびに」の「に」が理屈っぽいですね。「つみ木のあそびつもる雪」と名詞を並べたことですっきりしました。でも、まだまだ万太郎は満足しません。最終的には「つみ木のあそび」を「木をつむあそび」に直しました。「つみ木」という既成の言葉ではなく、「木をつむあそび」という、自分の言葉にしたことで、ぐっとこの句の世界にひきこまれます。「淋しさ」を「さびしさ」とひらがなにしたのも小技が効いています。(～略)

如何でしょうか。これだけでも「俳句はそういう世界か」と、思ってしまう。来月は「新年」です。スケジュール通りいけば、1月10日が句会になります。句会を迎える姿勢、俳句を詠む姿勢、12月の句会に生意気なことを書かせていただきました。でも一番大切なのは、「舌頭千転」でないかと思います。

では皆さん、来年も元気な一年に致しましょう。どうぞよいお年を!!

(白然記)